

# 慶應義塾大学外国語教育研究センター

# Newsletter

Vol. 5

Jun. 2005

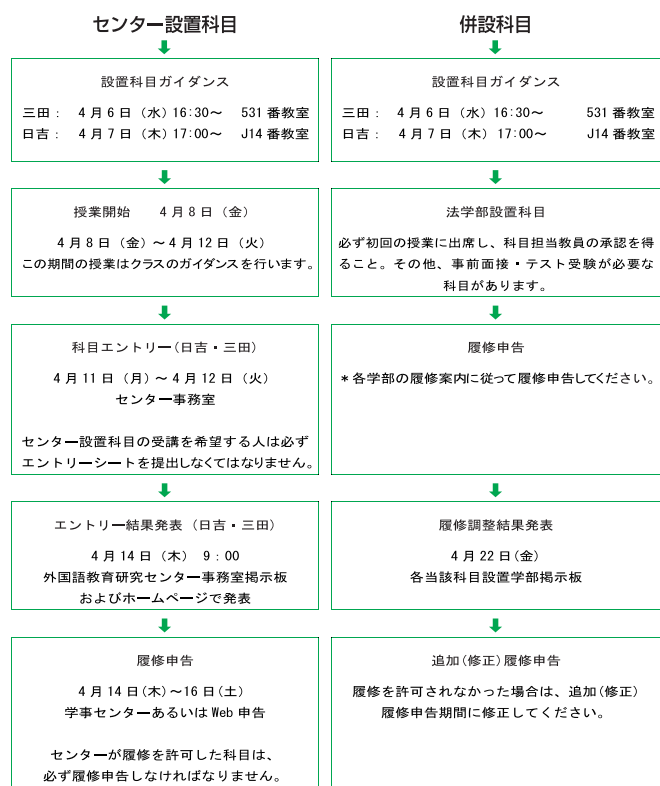
## 外国語教育研究センター設置科目履修状況

外国語教育研究センター所長 迫村 純男

本年度の外国語教育研究センター設置科目に対する受講状況は、次ページの通りです。英語については、日吉、三田のTOEFLとTOEICの対策クラス、三田設置の経済・金融英語への需要が非常に多く、定員の8倍以上の競争になったクラスもあります。アドバンスト英語(最上級)はTOEFL600点以上という高い英語能力を受講資格として設定しましたが、日吉、三田の3クラスで、10名前後という理想的なクラスサイズで授業が行われています。新設のIELTS対策クラスもイギリスへの留学を希望する学生が集まっています。英語の初級クラスについては、昨年度の「発信英語(初級)」を「英語初級1(文法・作文・リーディング)」と「英語初級2(発音・リスニング・スピーキング)」という二本立てにしましたが、希望者は多く、今年も抽選になりました。三田にも初級のクラス(英語オール・プレゼンテーション)を初めて設置しましたが、定員の3倍近い需要がありました。

英語以外の言語については、「表現技法」というレベル別のクラスが設置されており、定員を大幅に上回ることはありませんでしたが、運用能力を高めたいという学生の希望に応じることができたと考えています。また本年度新設のアラビア語とインドネシア語についても理想的なクラスサイズで授業が開始されました。来年度のセンター設置科目については、本年度のデータを分析し、学生のニーズに応じられるよう、検討していくつもりです。

### 外国語教育研究センター(日吉・三田) 受講までの流れ



## CONTENTS

### 外国語教育研究センター設置科目

履修状況	迫村 純男	1
インドネシア語ベーシック	野村 亨	3
英語異文化トレーニング	吉田 友子	3
研究プロジェクト活動報告		
Writing for the TOEFL Test	水野邦太郎	4
メディアで学ぶフランス語	古石 篤子	4
講演会		
Bernd Rüschoff 教授	吉田 友子	5
松岡佑子さん	山口 昌子	5
湘南藤沢高等部の英語教育	藤田真理子	6
Announcements		
e-learning教材「NetAcademy」		7
オーストラリア短期語学研修		7
TOEIC-IP		7
夏季外国語セミナー		8
嘱託所員紹介		8
編集後記		8

# Education センター設置科目履修状況

語 種	曜日/時限	科 目 名	定 員	応募者数
<b>日 吉</b>				
英 語	月・3	英語最上級 アドバンスト英語	25	15
	木・3	英語最上級 アドバンスト英語	25	10
	水・4	英語異文化トレーニング	25	21
	月・2	英語ドラマ	15	11
	木・2	英語翻訳	20	20
	金・4	英語アカデミック・ライティング	25	35
	火・2	英語テスト対策 TOEFL ( )	30	89
		英語テスト対策 TOEFL ( )		81
	水・3	英語テスト対策 TOEFL ( )	30	91
		英語テスト対策 TOEFL ( )		78
	水・2	英語テスト対策 TOEIC ( )	30	140
		英語テスト対策 TOEIC ( )		146
	月・5	英語テスト対策 TOEIC ( )	30	68
		英語テスト対策 TOEIC ( )		69
	木・5	英語テスト対策 TOEIC ( )(上級)	30	47
		英語テスト対策 TOEIC ( )(上級)		46
	水・4	英語テスト対策 IELTS ( )	30	8
		英語テスト対策 IELTS ( )		7
月・1	英語オーラル・プレゼンテーション ( )(初級)	20	28	
	英語オーラル・プレゼンテーション ( )(初級)		27	
木・4	英語初級1 (文法・作文・リーディング)	30	51	
木・5	英語初級2 (発音・リスニング・スピーキング)	30	51	
ドイツ語	金・4	ドイツ語表現技法1 (初級発音・聴解練習)	25	14
	月・4	ドイツ語表現技法2 (ボキャブラリー・トレーニング)	25	5
	水・4	ドイツ語表現技法3 (初級文章表現法)	25	1
フランス語	木・1	フランス語表現技法1 ( )(課題作文)	20	3
		フランス語表現技法1 ( )(課題作文)		3
ロシア語	金・4	ロシア語聴解 (ロシア語の音のシャワーを浴びよう)	25	3
中国語	火・4	中国語聴解1 ( )(上級)	25	15
		中国語聴解1 ( )(上級)		15
	金・5	中国語表現技法1 ( )(上級)	25	13
スペイン語	火・4	スペイン語表現技法1 (初級)	25	17
	金・3	スペイン語表現技法2 (中級)	25	6
インドネシア語	月・3/金・3	インドネシア語ベーシック	30	5
アラビア語	水・3	アラビア語	30	11
	水・4	アラビア語	30	10
<b>三 田</b>				
英 語	木・2	英語最上級 アドバンスト英語	25	11
		英語翻訳 (最上級)		15
	水・2	英語テスト対策 TOEFL ( )	30	89
		英語テスト対策 TOEFL ( )		81
	火・5	英語テスト対策 TOEIC ( )	30	91
		英語テスト対策 TOEIC ( )		90
	火・2	英語テスト対策 TOEIC ( )	30	252
		英語テスト対策 TOEIC ( )		241
	木・1	英語テスト対策 TOEIC ( )	30	99
		英語テスト対策 TOEIC ( )		95
	月・3	英語経済・金融 ( )	30	83
		英語経済・金融 ( )		76
	月・4	英語法律・法務 ( )	30	32
		英語法律・法務 ( )		29
月・5	英語オーラル・プレゼンテーション ( )(初級)	20	58	
	英語オーラル・プレゼンテーション ( )(初級)		56	
火・1	英語アカデミックライティング	25	23	
	英語アカデミックライティング		21	
ドイツ語	月・3	ドイツ語表現技法4 (中上級聴解・口頭表現)	25	5
	火・4	ドイツ語表現技法5 (中・上級文章表現法)	25	4
フランス語	月・3	フランス語表現技法2 ( )(DELFL第1段階対応クラス)	20	30
		フランス語表現技法2 ( )(DELFL第1段階対応クラス)		26
	月・4	フランス語表現技法3 ( )(DELFL第2段階対応クラス)	20	9
		フランス語表現技法3 ( )(DELFL第2段階対応クラス)		8
	木・1	フランス語表現技法4 ( )(DALFL対応クラス)	20	5
フランス語表現技法4 ( )(DALFL対応クラス)		7		
ロシア語	金・3	ロシア語表現技法1 ( )(映画とドラマでロシア語を学ぼう)	25	1
		ロシア語表現技法1 ( )(映画とドラマでロシア語を学ぼう)		1
	木・4	ロシア語表現技法2 ( )(ロシア語で発信しよう)	25	1
		ロシア語表現技法2 ( )(ロシア語で発信しよう)		1
中国語	水・3	中国語聴解2 ( )(最上級)(時事中国語)	25	5
		中国語聴解2 ( )(最上級)(時事中国語)		5
	月・5	中国語表現技法2 ( )(最上級)(作文と翻訳)	25	7
スペイン語	金・4	中国語表現技法2 ( )(最上級)(作文と翻訳)	25	6
		スペイン語表現技法3 ( )(上級)		5
		スペイン語表現技法3 ( )(上級)	25	4

## 新設科目紹介「インドネシア語ベーシック」

総合政策学部教授 野村 亨

スラマツ・ダタン! 皆さん、声を出してこのカタカナで書いたフレーズを発音してみてください。これはインドネシア語で「ようこそ!」という意味です。そう、カタカナ書きの通り発音してもらえばほぼ通じます。これで、インドネシア語の発音が割合我々日本人にとって難しくないということが分かってもらえると思います。

インドネシア語はたんにインドネシア共和国の国語であるばかりではありません。この言葉は元来マレー語を基礎として発達した言語で、隣のマレーシアやシンガポールなどで話されている言語マレー語とは親戚同士であり、相互に理解が可能です。つまりインドネシア語を含めて広義のマレー語が話されている地域は**インドネシア共和国、マレーシア連邦、シンガポール共和国、ブルネイダルサラーム国、東チモール共和国**そして**フィリピン共和国**の南部と**タイ王国**の南部、それに**バブアニューギニア独立国**の一部が含まれます。

このうち、先に挙げたインドネシアから東チモールまでの5カ国ではこの言葉が国語ないしは公用語として使われています。東南アジアには現在11の国家がありますから、マレー語(インドネシア語)はほぼその半分の国で使われているわけです。これら5カ国とその周辺地域に住む人々の総人口はおよそ2億7000万人ですから、日本の総人口の約2倍の人々がこの言葉を話しています。以上に挙げた各国はいずれも日本との経済的なつながりが非常に緊密な国々ですから、将来東南アジアで活躍しようとしている諸君にはうってつけの言語であるといえましょう。

今年度から日吉キャンパスでインドネシア語ベーシックの授業が新たに設けられました。この機会に一人でも多くの学生諸君が東南アジアを代表する言語インドネシア語に触れていただけることを心から希望しております。

## 新設科目紹介「英語異文化トレーニング」

商学部助教授 吉田 友子

今年新設された「英語異文化トレーニング」には商学部、法学部、文学部、経済学部、理工学部から総勢21名の学生が受講している。この授業の位置づけは「異文化間コミュニケーション入門」といったところである。授業は全て英語で行われているため、対象者は留学を検討中の学生、アメリカ式の授業を受けてみたい学生、異文化間コミュニケーションそのものに興味のある学生等である。授業は学生自らがシミュレーション、ディスカッションやプレゼンテーション等を積極的に行なうことで展開していく。

授業はBrislin & Yoshida (1994)が提案している4つの要素に基づいて組み立ててある。

### 1. Awareness

文化は空気のようなものであり、よほどのことがない限り、その存在を意識することが少ない(Brislin, 2000)。授業では、まず自分の価値観などを含む自文化の認識、文化の差の認識、さらに自分が持つ先入観や偏見を認識することから始まる。

例えば、文化によって同じジェスチャーや行動が違う意味を持つということの認識。それから、常識自体が文化によって違うという認識。どのような行動が礼儀正しいとされるのかも文化によって違うという認識等である。それぞれの違いがどのように我々の日常生活、学校教育やビジネス場面に影響を及ぼすかをシミュレーションやビデオ、さらにケーススタディ等を通して学ぶ。プロジェクトとしてはチームに分かれ、それぞれが選んだ場所に行き、観察し、mini-ethnographic studyを行なってもらう。

### 2. Knowledge

次のステップでは具体的に文化の影響を見ていく。文化についての知識としてはおおまかに二つある。どの文化であるかに関わらず当てはまる理論などをculture general knowledgeといい、特定の文化についての情報をculture specific knowledgeと言う。Culture general knowledgeとしてはオランダの社会学者Geert Hofstede(1991)の文化の次元を学ぶ。Culture specific knowledgeとしては日米の文化の差、国別のジェスチャーやビジネスや教育などといった面への文化の及ぼす影響を眺めてみたい。

### 3. Emotions

文化は私達に様々な価値観を与えてくれる。なにが美しいか、おいしいか、良いか等すべて文化に影響されている。その結果、違う文化との接触の際、私達の根本にある価値観が揺るがされることになる。異文化接触とは感情的なものである。カルチャーショックやアイデンティティー・クライシス等を感じることもしばしばある。この授業では、ビデオ等を通して文化とアイデンティティーを探っていく。

### 4. Skills

最後に実際に異文化摩擦が起きているケーススタディをどのように分析していけばよいかを学ぶ。一つの方法としてはDescription(描写)、Interpretation(解釈)とEvaluation(評価)に分けていくということだ(Berlo, 1960)。根拠としては文化の異なる者同士の接触では行動や動作を誤って解釈したり、評価したりする傾向があるため、まずはなるべく客観的な描写をし、解釈や評価に当たってはその文化の中で育った人々に聞いて確かめるといったことだ。

一年間という短い期間で出来ることは限られているが、異文化コミュニケーションとは何かについて少しでも学生の理解を深めることができればと思う。

### 引用文献

Berlo, D. (1960). The process of communication. New York, NY: Holt.

Brislin, R. (2000). Understanding culture's influence on behavior, 2nd edition. Fort Worth, TX: Harcourt Brace Jovanovich.

Brislin, R. & Yoshida, T. (1994). Intercultural communication training: An introduction. Newbury Park, CA: Sage.

Hofstede, G. (1991). Cultures and organizations: Software of the mind. Berkshire, England: McGraw-Hill Book Company Europe.



## 自律学習・ICTプロジェクト：「実験授業」の報告

自律学習・ICT(Information Communication Technology)プロジェクトでは2004年秋学期に、ICTを活用して自律的な学びの姿勢を涵養する授業を構築することを目標に3つの実験授業を企画・実行した。1つは外国語教育研究センターにおいて学生を対象にした“Writing for the TOEFL Test”(水野邦太郎担当)であり、他の2つは慶應義塾外国語学校において社会人を対象とする生涯学習の枠組みの中で行った「メディアで学ぶフランス語」テレビ版(慶應丸の内シティキャンパス、國枝孝弘担当)とラジオ版(日吉キャンパス、古石篤子担当)である。ここではこのうち今学期も継続して行っている2つについて簡単に報告したい。

### Writing for the TOEFL Test

講師 水野 邦太郎

2000年10月よりTOEFLがコンピュータ方式に変わり、ライティングが必修となった。そこで、将来、英語圏の大学院に留学を志す学生たち(TOEFL ITPのスコアが520~550)がライティングのセクションで高得点を上げ、留学中に課せられるレポートにも対応できることを目標に、2002年から慶應義塾大学と上智大学でインターネットを媒介にして“Writing for the TOEFL test”という授業を実践してきた。

ライティングのセクションの採点は0.5点きざみで0~6点の幅があり、2人の採点者による平均点でつけられる。授業でも同じ採点方法をとる、筆者とアメリカで英語教師をしているアメリカ人の友人の平均点が、電子掲示板を媒介にして表示されるシステムをつくった(<http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/TOEFL/2001f/>)。学期始めのスコアの平均点は、3.0前後である。目標として、全員が4.5以上を目指す。毎学期、学期末までに9割の学生が目標に到達し、7割が5.0以上のスコアに到達する。

学期の前半は「ETSの採点者が高得点を与えるエッセイとはどのようなものか」という主題を追究していく。また、ライティングの力を伸ばすには「量」を書かせることが必要である。そこで「授業外」にIWC(Interactive Writing Community) Projectに参加して([http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/IWC/real\\_index.html](http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/IWC/real_index.html)) Global IssuesやFor & Againstに関する様々な問題について、国内外の学生たちとエッセイを投稿し、互いに読み合い「コメント」を書き合う。そうして、英語を「自己を表現し」、「人と人との絆を結ぶ言葉」として使い、本モノの表現活動を実践する。IWCにはこれまでに、上智大学、早稲田大学、京都大学、立命館大学、アメリカ、インド、韓国の大学が参加してきた。

学期の後半は、TOEFL Writingのホームページ上に設置されたBBSを活かしながら毎週テストを行い実践を重ねていく。そして、学習の「過程」において、斉藤(2001<sup>1</sup>)が提唱している「21世紀を生きるための3つの力(真似る・盗む力<sup>2</sup>、段取り力、コメント力)」とリンクさせながら、授業に参加して学んでいることが単なる試験対策に終わることなく、生涯にわたって役に立つ知力を身につけられるようにデザインされている。

学期を通じて「学んでいることがどう生きて働いているか」をウェブ上で「数字」という形で互いに見ることができるのは、授業に参加し努力を続けるうえでの大きなモチベーションとなる。さらに、IWCへの参加を通して「自分の英語が生きて働いている」ことを肌で感じることができる。このような「活動的で協同的で反省的な学び(active, collaborative and reflective learning)」を組織する「機能的な学習環境」を築きあげるのに、コンピュータは有力な道具となる。

<sup>1</sup> 斉藤 孝『子どもに伝えたい<三つの力> 生きる力を鍛える』NHKブックス, 2001.

<sup>2</sup> 特に「真似る・盗む力」については、以下を参照。水野 邦太郎『ライティングの授業に英辞郎を大活用』英辞郎 第二版『アルク』, pp.52-55, 2005.

### メディアで学ぶフランス語

総合政策学部教授 古石 篤子

この授業は教室での全7回の(ほぼ)隔週で行われる対面授業から成り立ち、自宅でNHK「ラジオフランス語講座入門編(月~木20分/日)」を聞き、インターネット接続のできる環境にあることを受講の条件とした。当初の計画では授業頻度の異なる授業(毎週と隔週)を2つ設定し、学習状況や成果の比較を行う予定であったが、結果的に隔週授業のみの開講となったため、その意味での「実験」は不可能となった。しかしこのような授業形態は新しい試みとして学ぶことも多くあったので、教師の役割とインターネットのそれに絞って報告したい。(詳細は発行予定の「実験授業報告書(仮称)」を参照されたい。)

まず、前提となる授業形態からして当然のこととはいえ、授業における教師の位置づけに「コベルニクスの転回」が見られた。学習内容のメインソースはラジオ講座であるから、教師は「教える」存在ではなく、学習のアドバイザーが学習成果をチェックする者としての存在にすぎなくなる。いきおい教室も「教える」場ではなくなり、今回は主に発音指導や暗記のチェック、そして学習言語を使っのやりとりを重点的に行う場となった。

このように「学習者が自ら学ぶ」環境形成を大きく推進する役割を果たしたのが、ウェブ上の掲示板である(残念ながらウェブ教材ではない)。当初、教師や受講者間のコミュニケーションを図るために手作りの単純なものを用意したが、受講者からの提案でソーシャル・ネットワーキングサイト「mixi」に乗り換えた。これは既存のフリーの掲示板であるが非常に機能的にできていて、連絡、質疑応答、そして意見交換などに大いに威力を発揮した。終了後のアンケートでは、mixiの利用が学習の動機づけや継続を支えるのに大いに役立っていたことがわかる。同じキャンパスで生活する学生と異なりふだんはバラバラに生活している社会人であるからこそ、ネット上のバーチャルな共同体が学びの継続と質の保証に威力を発揮したのだと思う。インターネットの効果的な利用は今後通信教育などにも応用できる方法論である。

最後に学習成果について一言付け加えておくと、最後の授業時に「実用フランス語検定試験」4級の問題をやってもらったところ、9人中6人は合格ラインに達していた。今学期には同じタイプの授業を今度は「毎週」の頻度で実施中である。

## Bernd Rüschoff 教授講演会

## “Using Computer &amp; Internet to Enhance Intercultural Learning”

外国語教育研究センター副所長 吉田 友子

去る4月1日、午後3時から4時半までDuisburg-Essen大学のBernd Rüschoff教授が行った“ Using Computer & Internet to Enhance Intercultural Learning ”というタイトルの講演は大変興味深く、そのまま授業に使えるものも多く、非常に有意義な2時間弱であった。

Intercultural learningを教える際に役に立つ理論( Byram, 1997やKramersch, 1993 )や実際に使えるテクニック等が盛りたくさんであった。基本的にRüschoff教授の考えは二つである。一つには文化とは地理や歴史だけではなく、人々の考え方や思想、そして行動などを含む。二つ目には異文化についての認識を高めるにはコンピュータやインターネットが大変役に立つ、ということである。たとえば、インターネットを通して他国の大学と共同プロジェクトができる。つまり実際に異文化と接すること( encounter )になり、そこから学ぶことが多い。また、学生が主体となり色々なプロジェクトができるため、学生が自ら様々なことを発見、あるいは体験することができる。

たくさんの具体例の中で筆者が特に気に入ったのは“ Photo soaps ”というパワーポイントを使ったドラマだった。Photo soapsでは学生がストーリーを書き、演じていく。ただ、それをビデオで撮るのではなくデジタルカメラで撮り、パワーポイントに取り込んでいく。さらに、吹き出しで台詞を書き加えることも出来る。Photo soapsは簡単に作成でき、さほどの手間もかけずにウェブに載せることができるのが魅力である。さらに、ビデオと違い、編集にかかる時間があまり長くないため、効率が良い。

ここではひとつの例をとりあげたが、本講演では他にも具体的なエクササイズやプロジェクトがたくさん紹介されている。関心のある方はデュースブルグ=エッセン大学のホームページを参照していただきたい。

<http://www.uni-essen.de/anglistik>

## 松岡佑子さん講演会「ハリー・ポッターの魔法とは!？」

外国語教育研究センター 山口 昌子

5月12日16:30から日吉キャンパス第4校舎J11番教室で講演会「ハリー・ポッターの魔法とは!？」が開催された。この講演会シリーズの初回は2000年11月(旧語学視聴覚教育研究室主催)、その後年間2~3本ずつ開催し、今回で12回目を迎える。開催の趣旨は、外国語に関わりのある職業を通じて実社会で活躍されている方を講師として招き、「現在学んでいる外国語を、将来、社会の中でどのように活かすことができるのか」というビジョンを塾生に具体的に示すことで、学習意欲や異文化間コミュニケーションへの関心を高めることである。

今回の講師である松岡佑子さんは、30年のキャリアをもつ同時通訳者であるとともに、静山社社長として出版業を営まれ、さらに、全世界で2億6000万部を超える前人未踏のベストセラー小説「ハリー・ポッター」シリーズの日本語翻訳を手がけられるなど、語学力を活かすのみにとどまらない多彩な才能を発揮されている。会場には、ハリー・ポッターを全巻読破したという熱烈なファン、通訳や翻訳という仕事に興味を持つ学生、一般社会人などおよそ300名が詰めかけた。

松岡さんは、『小学館世界名作文学全集』を読み漁った少女時代から、コツコツと英語を勉強した思春期、ICUでの大学時代、同時通訳者としての苦勞と活躍、生涯の伴侶の闘病と死、出版業界への船出、そして「ハリー・ポッター」との奇跡的な出会いへと、まるで自身の大切なアルバムを広げて見せるように話を進めた。そうした半生の中で起こった偶然的、しかし運命的な出来事や邂逅を、松岡さんは「魔法」というキーワードで紡いでいく。飛行機の中でたまたま隣に座った人と友人となり、やがて彼の描く美しい絵が「ハリー・ポッター」の表紙となって日本中の書店の店先を飾るなどと誰が思うだろうか。また、イギリスではすでに話題になっていた『ハリー・ポッターと賢者の石』の著作権がまだ日本で取得されておらず、それを当時まだ小さな出版社に過ぎなかった静山社が取得できるなど、誰が予想できただろうか。こうした「魔法」の数々を聞いてみると、次第に松岡さんが不思議な力を持った魔女のように思えてくる。しかし、魔女は一日にして成らず、その背後には松岡さんの並々ならぬ意志と努力と研鑽、そしてそんな彼女を支えた熱い友情があった。

「途中で投げ出したくなることはなかったか」との質問に答えて、松岡さんは翻訳の苦勞を「マラソンランナーの苦しさ」に喩える。とにかく長さに耐えること、しかし、好きでなければ走れないのだと。「物事の上達はかけた時間に比例する」。これは松岡佑子の法則と名づけられた魔女の金言であり、自分の夢に向かって努力を惜しまず突き進んでほしいという、塾生への最大級のエールであった。



## 一貫教育校の外国語教育(4)

### Lost in English Education

Mariko Fujita, Keio Shonan Fujisawa High School

At the beginning of the school year, I was asked to stand and watch our students at a bus stop near the train station. The manners of the students who get on the bus are said to be very bad and my colleagues said they need to be watched by teachers so that the students would behave well at least in the presence of teachers. So I got up a bit earlier than usual and stood at the bus stop. I saw many students listening to music through headphones, reading books, and talking with friends at the bus stop. They were so immersed in their world that they didn't care a bit about what others think of them. It is often said today that young people are only interested in themselves and don't show any concern for others. They are not open to the outside world and interact only with those they like and avoid interactions with others as much as they can. They confide their worries to people they meet on the Internet, but they never open their heart to parents or teachers. The world of the young people has become smaller and smaller, which is a headache for society. What role can education play in creating young people who will open their minds to the outside world? Can learning English help solve this problem? What can English teachers do so that students will be able to relate with others better?

I'm in charge of 6<sup>th</sup> year (third year high school) writing this year. I've decided the topic of the class will be how Japan is viewed by foreigners and prepared some writing tasks based on the topic. I chose this topic with the aim of having my students think about how non-Japanese people think of Japan, which is quite different from what the students think Japan is really like. As the first writing task, I showed them a movie called *Lost in Translation* and asked them to write a short movie review of no more than 200 words. I hoped that this movie would give them a good start to see the other reality which non-Japanese visitors experience when they are in Japan. I gave them about a week to hand in their first draft and to my surprise nobody was late in submitting it. Moreover, they wrote more and much better than I had expected. I corrected all the grammar and organizational errors of their first drafts in green, which took me more than half a day and gave them back today. Some students wrote that they liked the movie, and one student wrote "the movie held Japan in derision", [sic] as it describes Japan as a strange country, making fun of Japanese people who speak funny English. Another student commented on the scene where two main characters complain that a Shabushabu restaurant is the worst, because the waitresses are quiet, and not friendly at all, and they make you cook your own food. As a teacher, I'm not sure if I succeeded in opening their eyes to what non-Japanese visitors feel in Japan and think of Japanese people, but I hope some experienced the other Japan through the movie and have started to think that Japan may be inscrutable in many ways.

It is common sense that learning English is not just memorizing vocabulary and grammar rules. It's far more than that. However, the reality of most English classes is usually cramming bits and pieces of language into the brains of students. What activities help motivate students to learn English and cultivate cultural sensitivity? Will they be able to look at themselves objectively and understand not only themselves but also others better through such activities? I feel there is still a long way to go to reach this goal. We are still lost in English education.



## e-learning教材「NetAcademy」について

2005年度より、外国語教育研究センター内にサーバーを設置し、株式会社アルクの英語教材NetAcademyを5年契約で導入します。これはオンラインの自習教材で、特にTOEIC対策を考慮した文法、リスニング、読解力の練習問題を中心に構成されており、学生は日吉と矢上キャンパスに設置されているパソコンからアクセスして、自律学習を行うことができます。(現在、日吉と矢上キャンパスに在籍する学生のデータ登録等、運用開始に向けて準備を進めているところです。)また、CALL教室では、クラスを受講生をグループとして登録し、授業時間内にレベル別診断の一斉テストや個別学習を行うことができます。個々の学生の成績、進度は教員にフィードバックされるので、学生の進捗状況を把握することが可能です。

NetAcademyで得られる練習問題の成績データは研究目的に利用することができます。現在、デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構(DMC)のe-learningユニットでは慶應独自のe-learning教材を開発しようとしています。成績データを分析することによって、日本人の英語学習者の弱点を克服するための教材作りに役立てることが期待されています。

今後は、サーバーを増設することによって、三田、藤沢、信濃町キャンパスでも利用できるようにすること、また、NetAcademyの初級バージョンを導入することで、慶應義塾内のイントラネット環境で結ばれている一貫教育校の中学校、高等学校の生徒にも自律学習環境を提供することを計画しています。

## 2004年度 オーストラリア短期語学研修 レポート

当センターでは2005年2月5日～3月12日の5週間、シドニーにあるUniversity of New South WalesのInstitute of Languages (UNSWIL)に38名の塾生を派遣し、授業時間数120時間を超える集中英語研修をおこなった。

初日にオリエンテーションとプレースメントテストを受け、翌日から各レベルに分かれての授業が始まった。午前中2コマの授業では、主に文法や会話、ディスカッションの練習が、午後は事務棟にあるランゲージラボやパソコン教室を使ったライティング、リスニング等の訓練が行われた。発音の苦手な学生のために特別クラスが用意されたり、各クラスとも主担当の教員の授業が毎日1度は必ずあるなど、親身な指導がなされていた。

研修の前半と後半に同行した迫村所長は、授業開始前、昼休み、午後の授業後にオフィスパワーを設け、学生たちがよく集まるカフェテリア付近や屋外のベンチにて学習相談に乗ったり、現地生活を円滑に進めるためのサポートを行なった。

帰国後に実施したアンケートでは、「ストーリーテリング」という授業の人气が高かった。文法の授業に関しては、「説明が英語のため聞く力が強化できた」という前向きな視点がある一方、全体的に「物足りない」「時間をさきすぎる」という否定的な意見も多かった。

授業以外の項目では、「ホストファミリーとの生活を通してオーストラリアの水不足の問題や家族間の挨拶や名前の呼びかけの重要性などを学んだ」、「オーストラリア人のみならず、多様な文化背景を持つクラスメートとの交流が帰国後も続いている」など、塾生がさまざまな異文化を体験したことが分かる。また、参加者のうち、半数以上の塾生が英米カナダへの短期語学留学を希望しており、「漠然と思案中」「具体的に計画中」を合わせると、7割以上の学生が1年以上の長期留学について検討を始めていた。

### 参加学生の声(アンケートより)

- (ホストファミリーの子どもを見て)勉強に手間を惜しんではいけないと感じた。自己管理をしっかり行う大切さを強く学んだ。やはり日本について、宗教について、自分なりの考えや信念のようなものを持っているべきだったと反省した。
- 向こうのlanguage schoolにおける授業ではpositive/happyがkey wordsなのではないでしょうか。毎日自分から先生や仲間に積極的に接するようにする、あるいは無意識的にそうなることで自然と口から英語が出てくるようになっていたように思われます。

## TOEIC-IP 実施について

TOEICは、世界約60ヶ国で実施されている、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストです。かつて、留学を目指す人はTOEFLの、外資系企業や海外での就職を目指す人はTOEICのスコアが必要とされると言われていた時代がありました。しかし、こうした公開テストのスコアが就職試験にとどまらず多方面で活かされる機会が増えるに伴い、大学生の資格試験志向も年々強まり、留学や就職という目標をさしあたりもたない学生の中でもTOEICの受験ニーズは飛躍的に増加しています。また、自分の英語力を世界的な評価基準に照らして、学習のモチベーション向上に役立てることは、望ましいことでもあります。

そうした背景を踏まえて、2004年度より外国語教育研究センターでは年に2回、6月と11月の各第2土曜日にTOEIC-IPを開催しています。TOEIC-IPは、TOEIC公開テストと同様の試験形式および採点方法で実施されますが、公式認定証(Official Score Certificate)は発行されません。2005年度の第1回目は、5月16日から各地区の生活協同組合で受験申込み開始、6月11日(土)に三田キャンパス121番教室にてテスト実施の予定です。受験料は3,500円です(公開テストは6,300円)。この機会にぜひ学生へ周知くださいますよう、お願いいたします。

## 夏季外国語セミナー実施のお知らせ

当センターでは、来る9月13日～16日に義塾立科山荘にて夏季外国語セミナーを実施いたします。高原の快適な気候のもと、教員と学生が寝食をともにする打ち解けた雰囲気の中で集中的な外国語トレーニングを行います。

開講予定講座は本稿執筆時点では全10コース(英語5、ドイツ語1、フランス語1、中国語1、ロシア語1、スペイン語1)。詳細は右の表を参照ください。

本年度は「英語で環境学Planet Earth(上級)」コースを新設いたしました。環境学の概論を英語で学びつつ、立科山荘周辺環境もあわせて研究できるコースです。また、今年度は、学生から設置申請があったコースを開講するという試みを始めましたが、期限までに新設希望の申し出はありませんでした。来年度以降に期待したいと思います。

1972年にスタートしたこのセミナーは今回が34回目となります。ここ数年は60～70名の学生が参加しています。今回も多くの熱心な塾生が参加してくれることを望んでおります。教員の皆様には、授業などの機会に学生に当セミナーを話題にさせていただき、参加を促していただければ幸いです。

開講予定コース	講師
英語プレゼンテーションコース	日向清人、吉田友子
TOEFL対策コース	乗杉美千子、リチャード・パロウス
TOEIC対策コース	田上悦子
英語ドラマコース	横山千晶、ニコラス・ヘンク
英語で環境学 Planet Earth(上級)コース	デル・ハスケル
ドイツ語コース	境 一三
フランス語コース	笠井裕之、ジャン＝ミシェル・バルダン
ロシア語コース	杉野由紀、ウラジーミル・フィラートフ
中国語コース	山下輝彦、呉 敏
スペイン語コース	松田健児、鈴木恵美子

## 嘱託所員(有期)紹介

### 倉館 健一先生



このたび、外国語教育研究センターに嘱託所員として着任いたします。これまでSFCのフランス語講師として最先端の情報テクノロジーを外国語教育に取り入れる試みを続けてまいりました。最近では学生間交流の可能性を探るべくフランス・北京を訪問し、テレビ会議を利用した交流授業を行っています。

現在のところ、外国語教員の多くはテレビ会議の運用に懐疑的であったり、まったく縁がないように感じたりしているのではないかと思います。さまざまな要因が考えられますが、その多くは効果への疑問、利用方法を理解するまでの手間、物理的な準備へのきっかけの欠如などが原因なのではないでしょうか。このようなマルチメディアやネットワークを利用したオンライン教育により、授業外の活動のみならず、教室での活動も変わろうとしています。また求められる教師の役割やスキルも大きく変化しています。

こうしたギャップや変化に柔軟に対応するため、学生・教員・技術者を取り持つ総合コーディネーターとして、授業デザイン・プロジェクトの企画と運営・自律学習支援・教員支援・教材作成などに関われるならば幸いです。気軽に声をおかけください。どうぞよろしく申し上げます。

倉館 健一 (KURADATE Kenichi) kr@hc.cc.keio.ac.jp

## 編集後記

「Newsletter」第5号をお届けします。当センターの設置科目も今年で2年目に入りました。全科目の受講応募者数は三田・日吉合計で述べ2,848名。昨年に比べ約300人増でした。巻頭の履修状況報告にもあるとおり、特に人気が高かったのは英語のテスト対策関係の科目で、その大半は定員以上のため抽選となり、日吉で242%、三田で433%という高倍率でした。当然、希望したのに抽選に漏れて履修できない学生も数多くいます。非常に残念なことです。「テスト対策」という名前だけにとられることなく、それぞれの学生が自分なりの方法で語学の勉強を続けてほしいと思います。そういう気持ちで、今年も夏季外国語セミナーや各種講演会、ワークショップなどを開催していきたいと思っております。急がば回れ。意外なところにヒントが隠されているかもしれません。

外国語教育研究センター「Newsletter」編集担当 山口 昌子

## Newsletter

Jun. 2005. Vol. 5

慶應義塾大学外国語教育研究センター  
KEIO RESEARCH CENTER FOR  
FOREIGN LANGUAGE EDUCATION

発行日 2005年6月15日

代表者 迫村 純男

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

E-mail fcenter@info.keio.ac.jp

http://www.fcenter.keio.ac.jp/